

日本的なもの、ヨーロッパ的なもの

大橋良介



新潮選書

日本的なものを問い、ヨーロッパ的なものを問い、
両者が重層をなす日本近代を問い、近代の加速度
のゆくえを問う。それが本書のモチーフである。
こんな「歴史哲学」的な重い問いが、今日の流行
に合うとも思われない。ただこれらの問いは、ヨ
ーロッパにながく生活した自分自身の所在を確認
することとも重なり、国際化が迫られている現代
日本人の問題意識と或いは共通するかなと思っ
たりもする。

著者

日本的なもの、ヨーロッパ的なもの

大橋良介

新潮選書

1

にほんてき 日本的なもの、ヨーロッパ的^{てき}なもの

〈新潮選書〉



© Ryōsuke Ōhashi 1992, Printed in Japan

一九九二年二月二〇日 発行

著 者 大^{おお}橋^{はし}良^り介^{すけ}
発 行 者 佐 藤 亮 一
発 行 所 株 式 会 社 新 潮 社
東 京 都 新 宿 区 矢 来 町 七 一
郵 便 番 号 一 六 二
電 話 業 務 部 (03) 三 三 六 六 一 五 一 一
編 集 部 (03) 三 三 六 六 一 五 四 一 一
振 替 東 京 四 一 八 〇 八 番
印 刷 錦 明 印 刷 株 式 会 社
製 本 株 式 会 社 植 木 製 本 所

(乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替いたします。)

ISBN4-10-600414-3 C0310

価格はカバーに表示してあります。



おおはしりょうすけ
大橋良介

1944年京都に生る。京都大学文学部哲学科卒業後、ミュンヘン大学に学び哲学博士号を、ヴュルツブルク大学で教授資格を取得した。学問の系譜としては、ハイデッガーの孫弟子筋にあたる。現在、国立京都工芸繊維大学教授。戦前の西田幾多郎を頂点とする京都学派哲学の新生を担う有力な一人と目される。

著書は専門書のほかに、『切れの構造』『時はいつ美となるか』など。

現住所・京都市左京区高野東開町

I-23-41-401

日本的なものと、ヨーロッパ的なもの*目次

序

日本的なもの

第一章 日本美を貫く「二なるもの」

芭蕉と利休

I 四畳半の発見

心の寄り合う場所 畳の大きさは人間の身体が基準 奇数好きな民族性
四畳半の「半」の意味

14

II 日本座敷の「内」と「外」

襖や障子を「はずす」ということ 内と外の相互透入 死の床の句が語るもの
夢がかけ廻った枯野とは

20

III 一期一会をつくる場

村田珠光から武野紹鷗へ 利休の茶室「待庵」は「畳敷」茶室は「旅」の建築空間
室床がもつ縄文的な混沌 北斎「遠近法」における「二なるもの」

26

第二章 西洋思想「ヒロソヒ」の翻訳

西周

I 翻訳者・西周とその時代

洋学を志して脱藩 ミル、コントから出発した幕末知性 必ずしも活かされ

35

なかったその才能

Ⅱ 哲学用語はこうしてつくられた……………40

漢字による音訳から意識へ ヒロソヒが「哲学」になるまで 儒学や仏教の用語が下敷き

Ⅲ 「ヒロソヒ」の日本の受容と変容……………45

西洋の哲学は欧州の儒学？ 儒教的素養で解釈した西洋思想 正統的な研究への先駆的な橋渡し

破 日本「近代」とヨーロッパの「近代」

第三章 近代への不安 夏目漱石

I 『門』の場合……………54

漱石の「門」とニーチェの「門」 社会に背を向けて ニヒリズム彼我の違い 日本的ニヒリズムとしての仏教

Ⅱ 輪廻と永劫回帰……………62

漱石の主人公が求めたもの ヨーロッパ・ニヒリズムの仏教理解 門を通る人と通れない人

III 「遊ぶ」ということ……………	68
--------------------	----

何気ない会話の中の真実 親鸞や道元の説く「遊」 「遊び」が持つ自在性との
関係

IV 自己否定にみる東西の距離……………	73
----------------------	----

意味不明となった近代 近いようで遠いということの意味

第四章 禅から哲学へ 西田幾多郎

I 西洋精神と非西洋世界の出会い……………	78
-----------------------	----

三十代から抱いた課題 国際的な禅ブームの背景 問われている哲学の存在
理由

II 禅の言葉、哲学の言葉……………	84
--------------------	----

禅問答の中の言葉の位置 『善の研究』はどこからきたか 禅的体験と思慮分
別の関係

III 確認された両者の違い……………	90
---------------------	----

「ものとなって考える」 説明のできぬ禅的経験 日本のナシヨナリズムへの
批判

第五章 「いき」からの傾斜 九鬼周造

I 貴族出身の哲学者……………97

華麗な外貌と孤独な内面 「黄色い顔」という奇妙な詩 異国での女性遍歴の
背後にあるもの

II 欧化主義の中の「日本」……………103

「いき」の第一は異性の媚態 文化ナショナリズムへの傾斜 ハイデッガーが
感じた「危険」 大思想家の九鬼への回想

III 『「いき」の構造』の光と影……………113

「いき」を西欧風に説く方法 日本文化優位論の匂い 語られなくなった「い
き」

第六章 「問」の倫理 和辻哲郎

I 和辻人間学における「内」と「外」……………120

最初の著作はニーチェの研究 ハイデッガーらに競争意識 人間をどう理解
するか 敗戦による決定的な転換

II	抑制された観察者の意外な部分……………	127
----	---------------------	-----

新田『古寺巡礼』の間のある変化 「だらしな女」を眺める視線 知られざる

「一燈園」との関係

III	尾をひいた内面の「ひび」……………	137
-----	-------------------	-----

理想主義的な風潮の中で 彼自身への「弁明」あるいは「予言」

第七章 近代の超克 京都学派

I	ブラック・ホールの座談会……………	143
---	-------------------	-----

戦時下の「近代の超克」論議 日本浪漫派と文学界同人の突出 見直さるべき

京都学派のスタンス 火花散る小林秀雄と西谷啓治の論争 学者たちが戦争

責任を問われた理由

II	ヨーロッパと非ヨーロッパ……………	152
----	-------------------	-----

「二階建」に住む日本人 ヨーロッパ世界の相対化 絶対無という思想の登場

III	「絶対無」の今日性……………	157
-----	----------------	-----

一見、反時代的ではあるけれど 「諸近代の近代」の成立 テクノロジー時代
への課題

急

ハイ・テクの時代

第八章 ハイ・テク時代の日本的なもの

I 技術文明史の新段階

ドリーム説か暗黒論か 西洋化の流れの底に脱西洋化 近代化三つの時期
「内なる他者」への反省

166

II アジア的エトスの再検討

カルチャーと文化の違い 硬い普遍性と柔らかい普遍性 火薬の発明に見る
東と西の変化 一元的思考と多元的思考 李御寧氏の「風呂敷文化」論

173

III 西欧も学ぶ時代

連歌の座がつくる切れとつづき 漢字文化圏共通の柔かさ ハード・テク
ノロジの受け入れ方

182

第九章 「歴史時間」は加速する

I ヘーゲルの生きた時代

ヨーロッパが生んだパラドックス 貧乏学者ヘーゲルが見たナポレオン 愚
名高き世界史観 ヨーロッパ的なものの哲学的表現

189

Ⅱ	ヨーロッパ精神の終着点	197
---	-------------	-----

「発展」という考え方	「時間」が早くなることへの不安	破局をも予感させる 加速度
------------	-----------------	------------------

Ⅲ	日本的「歴史時間」	202
---	-----------	-----

「行人」という表題が象徴する意味	「生花」にみる時間の切り方	未来への一 つの鍵
------------------	---------------	--------------

第十章 テクノロジーと宗教

Ⅰ	「創世記」以来の大テーマ	209
---	--------------	-----

「創世記」が物語る現代の問題	肉体から「身体」へ	「有用性」という名の鎖
----------------	-----------	-------------

Ⅱ	東洋思想からの示唆	214
---	-----------	-----

莊子の「無用の用」	「遊戯」の境地とは	外への拡がり、内への拡がり
-----------	-----------	---------------

〔付録〕西周の詁語一覧	221
-------------	-----

あとがき	224
------	-----

日本的なもの、ヨーロッパ的なもの

原

书

缺

页

原

书

缺

页

序

日本的なものの